# INMP

MUSEUMSFORPEACE.ORG

通信 No.40　　4月号　2024

INMP

INTERNATIONAL NETWORK
OF MUSEUMS FOR PEACE
NEWSLETTER

第４０号

# INMPとは

*国際平和博物館ネットワーク（INMP）は、平和な世界を築くために尽力するミュージアムと関連プロジェクト、そしてそれらを支援する組織と個人の世界的コミュニティです。私たちは、平和のための教育を推進し、平和の文化を築き、地球規模の環境平和を促進するために平和のための博物館（および関連団体）間の知識、資源、最善の実践を特定し、共有し、広めるために活動しています。*

**INMP NEWSLETTER EMAIL**
inmp.news@gmail.com

**INMP WEBSITE**
http ://m u seum sforp eace.org

@museumsforpeace
@museumsforpeace
@inmp_museums_for_peace

INMP

INTERNATIONAL NETWORK
OF MUSEUMS FOR PEACE
NEWSLETTER

ISSUE #40

## 投稿について

# 41号(9月号 2024)

41号の投稿締め切りは2024年7月15日。
応募方法： 電子メールで inmpnews@gmail.com　Kya Kim （編集長）へ
ご質問・お問い合わせ： 電子メールで inmpnews@gmail.com

次のような記事を歓迎します。

- 平和に関連する問題やテーマを取り上げた簡単な記事(500語以内、jpg画像3枚まで、別ファイルとして添付)
- 展示会、平和教育イベントなど、INMP加盟館からのお知らせ。(500語以内、 jpg画像3枚まで、別ファイルとして添付)
- 出版募集、論文募集、平和関連会議、助成金・プロジェクト募集、奨学金募集など（250字以内、jpg画像3 枚まで。）
- 出版・書籍のお知らせ250字以内、jpg画像3枚まで。）
- 平和に関連する作品、詩、写真（ 画像については、高解像度のjpgファイルのみをお送りください。）

*INMP 通信は、日本語とスペイン語でも入手可能です。*
*本ニュースレターの記事は、執筆者の見解を代表するものであり、必ずしも編集チームや国際平和博物館ネットワークのメンバーの見解を代表するものではありません。*

購読申し込みは、こちらへ
https://forms.gle/jdxR5mng3d7qqK1v7

INTERNATIONALNETWORK
OFMUSEUMSFORPEACE
NEWSLETTER

ISSUE#40

# 目次

目次の詳細 3
コーディネーターからのメッセージ 4
特集の芸術家: Malak Mattar 5
追悼 Johan Galtuing 6
ハーグのイ・ジュン平和博物館 8
平和のための博物館とガンジー非暴力主義 9
非暴力の季節 11
呼吸をさせて”（テヘラン平和ミュージアム） 12
特集の芸術家作品 ：“マスク ” 14
ブラッドフォード平和ミュージアム最新情報 15
パウ・カザルス博物館：平和のためのインスピレーション博物館( カタルニャ，スペイン） 16
増田正昭展示会 18
ジョン・ ラーベ記念館年次大会( 南京） 20
戦争抵抗同盟100周年記念移動展示（ＷＲＬ），１９２３－２０２３ 21
詩的アルピレラス（展示） 23
伝言館におけるジャネット・ランキン特別展 25

平和のためのポスター（ウィーン平和博物館） 27
難民の生活の一日：ガザの停戦のための巡礼 29
特集の芸術家作品： 「ガザ、子どもたち、平和」 30
ウオンガヴェリーアジア太平洋平和博物館の開館 31
ザルディ 32
「昨夜、私は最も奇妙な夢を見た。」 33
特集の芸術家作品：「ガザで昨夜」 34
ダライ・ラマに『平和のためのミュージアム』を贈呈 35
日本でのＩNPM /ＩＮＭＰ 通信の紹介 37
出版物共同体の記憶を越えて 38
ウィーン平和ミュージアムから２冊の本 39
カンボジア平和ギャラリー 40
消えない記憶：タクバイの20年 40
特集の芸術家：オリーブの収穫 42

「馬といる少年を抱く母なる自然」
作家：
Malak Mattar（パレスチナ、ガザ）
マラック・マタールについては、本号の P.5をご覧ください。

## 編集者と翻訳者

英語版編集：Kya Kim （編集長）、Robert Kowalczyk、Tanya Maus
日本語翻訳：赤松敦子、寺沢京子、李敬史、山根和代日本語版編集：安斎育郎 山根和代
イラスト：戸崎恵理子
スペイン語版翻訳者: Iratxe Momoitio Astorkia

# INMPの新コーディネーター・チームの紹介

Mona Badamchizadeh, Junko Kanekiyo, Clive Barrett

**INMPに新しいコーディネーター・チームが誕生しました！**

前任のイラチェ・モモイティオ・アストルキアさんと乗松聡子さんの両コーディネーターは、世界中のメンバーの積極的な参加を得て、新しくダイナミックなINMPを形成する上で大きな影響力を発揮しました。彼らの任期中（2021～2023年）には、活発なワーキンググループ、教育セミナー、平和遺産プロジェクト、ウプサラでの素晴らしい大会などが行われました。INMPは彼らに大きな感謝を捧げます。

イラッチェさんと聡子さんはINMPを円満に去ることができました。このネットワークは、「平和のための博物館」を自認し、協力し、励まし合いたいと願う世界中の重要な加盟施設と、それらの博物館を支援し、平和のための博物館が拡大し、繁栄することを切望する多くの献身的な人々を結びつけるものです。私たちは共に、分断された世界が必要としている平和の文化を築く手助けをすることができるのです。

私たちはINMPの新しいコーディネーター・チームとなることを嬉しく思います。私たちは、モナ・バダムチザデ、兼清順子、クライヴ・バレットの3名で、ミュージアムの分野で豊富な経験を持ち平和ためのミュージアムの世界にも深く関わっています。中東、アジア、ヨーロッパからのユニークな強みと多様な専門知識を持つ私たちはINMPのために団結力のあるダイナミックなチームとなることを目指しています。私たちは、ミュージアムを通じて平和を促進することに情熱を注いで います。

私たちの連絡先は以下の通りです。貴施設がより効果的な平和のための博物館となるよう、皆様からのご連絡とご協力をお待ちしております。

**MONA BADAMCHIZADEH**

inmp mona@gmail.com

**JUNKO KANEKIYO**

inmp.junko@gmail.com

**CLIVE BARRETT**

inmpclive@gmaill.com

# マラック・マター MALAK MATTAR

KYA KIM

表現主義的な顔や人物、半抽象的なデザインを描く独学アーティストであるマラック・マターは、2014年の51日間にわたるガザへの軍事攻撃の最中、14歳の時に学校の画材を使って絵を描き始めた。彼女の作品は世界中のギャラリーや美術館から注目を集めるようになり、それ以来、彼女の絵画はコスタリカ、イギリス、フランス、インド、パレスチナ、スコットランド、スペイン、オランダ、イタリア、ドイツ、スイス、トルコ、アメリカ11州の個展やグループ展で紹介されている。また、彼女の半生を描いた絵本『Sitti's Bird』の著者であり、イラストレーターでもある。

*マラク・マター作 "No Words "の一部*
*Image by Phoebe Wingrove*

*Malak Mattar: Image by Phoebe Wingrove*

ガザで生まれ育ったマラックは現在ロンドンに在住し、セントラル・セント・マーチンズ・カレッジで美術の修士号を取得するために勉強中。運命のいたずらで、彼女はハマス主導の攻撃の前日、10月6日にガザ地区からロンドンに向かった。彼女はアルジャジーラのインタビューで、「2014年は、私たち全員が語り継ぐ戦争です。51日間の封鎖。死と破壊。しかし、私はこれがより悪くなることがわかりました.....私はただ、それがジェノサイドになるとは思いませんでした」と、彼女の祖国に対するイスラエルの継続的な猛攻撃について言及した。

ピカソの代表作『ゲルニカ』を彷彿とさせるモノトーンの大作 ″No Words ″は、彼女が残された友人や家族が体験した恐怖を描いており、最近ロンドンで開催された彼女の個展で紹介された。
「言葉では表せない。自分は生き延びたけれど、愛する人たちはみんなその中で生きている。恐ろしい痛みです」と彼女は同じアルジャジーラのインタビューで語っている。
今号で紹介する絵画は、10月7日以前に作家から提出されたもので、パレスチナ人の精神の回復力を見ることができる。明るい希望に満ちた色彩、貴重な平和の鳩、そして愛情深い家族に抱かれた子供が感じる柔らかく安全な抱擁。この若いアーティストの作品に記録されているように、暴力に支配されていても、平和は常に子どもたちの心の中で守られ、育まれてきた。色はくすんでしまったが、光は明るく燃えている。

*Malak MattarのInstagramはこちら：*
*@malakmattarart*
*Eメールでのお問い合わせは、*
*malakmattar47@gmail.com.*
*彼女のプリントはEtsyページで購入可能：*
*https://www.etsy.com/shop/MalakArtStore?ref=shop-header-name&listing_id=784951888&from_page=listing*

（翻訳：寺沢京子）

## IN LOVING MEMORY

故人を偲んで

# JOHAN GALTUNG

ヨハン・ガルトゥング

KYA KIM キヤ・キム

*トランセンド・メディア・サービスのご厚意による画像*

ノルウェーの24歳の良心的兵役拒否者であったヨハン・ガルトゥングは、6ヶ月の獄中生活をモハンダス・K・ガンジーの著作を読んで過ごしました。ガルトゥングは戦争に代わる紛争解決策を明らかにしようとしていたのです。この時ガルトゥングが身につけたガンジーの非暴力（アヒンサー）の原則に基づく基礎は、彼の数学の素養とともに、人文主義的であると同時に科学的探究に基づく平和構築への戦略的アプローチに天才的な才能を発揮させることを助けました。ガルトゥングは、平和と紛争研究という学問分野の先駆者として、また、紛争を分析し、持続可能で積極的な平和の創造的解決へと転換させる方法論を開発した人物として広く知られています。

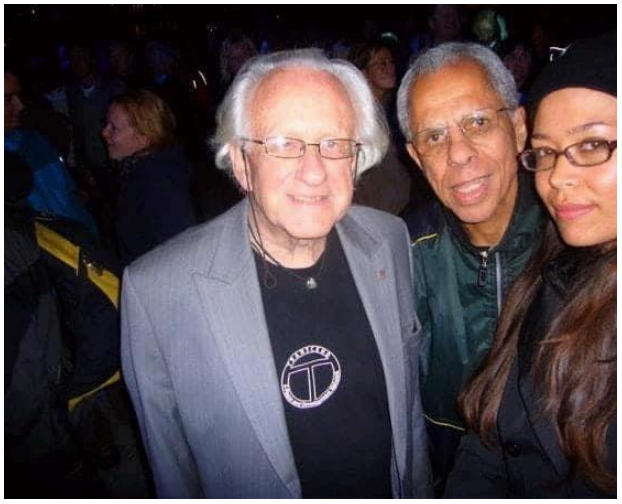
1959年、ガルトゥングは（イングリッド・エイデ、アルネ・ネス、ヘルゲ・ヘヴェームとともに）世界初の平和・紛争研究の学術研究センターであるオスロ国際平和研究所（PRIO）を設立し、1964年には平和研究ジャーナル（Journal of Peace Research）を創刊しました。平和研究に170冊の著書と無数の論文を執筆して貢献し、世界中の大学で教授を務め、1957年以来、世界各地で150件以上の紛争を調停してきました。彼の際だった貢献のひとつは、論文「暴力、平和、平和研究」（Journal of Peace Research、1969年）で「構造的暴力」という言葉を生み出し、「紛争」と「暴力」を明確に区別したことです。（「この2つを混同するな！」という彼の言葉が聞こえてきそうです）。

1993年、ガルトゥングは妻の西村文子さんとともに、平和、開発、環境のための世界的ネットワークであるトランセンド・インターナショナルを設立しました。その会員は70カ国以上の500人以上となりました。トランセンドのモットーは「平和的手段による平和」です。彼らの活動は、商業、教　育、報道、ジェンダー、開発、環境などの分野における草の根の訓練や調停を通じて、平和理論を実践に移すことに重点を置いています。ピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲンによれば、ガルトゥングは大阪と京都で開催された第3回INMP会議で短いプレゼンテーションを行い（会議録に掲載）、2005年にゲルニカで開催された第5回INMP会議にも出席したということです。

*西村文子さんとヨハン・ガルトゥング、ヤン・オバーグのご厚意による画像*

筆者がガルトゥング教授と出会ったのは2003年、アメリカの大学生だった私がジェイク・リンチがファシリテーターを務めるピース・ジャーナリズムのワークショップに参加するため、16時間車を運転して行った時でした。ピース・ジャーナリズムに深い感銘を受けた私は、数年後、トランセンド・メディア・サービス（TMS）の最初の専属ピース・ジャーナリストとしてオーストリアのシュタットシュライニングに招かれました。アントニオ・CS・ロサと協力して、ガルトゥング、メイリード・コリガン・マグワイア、ポール・スコット、ヤン・オバーグ、HB・ダネッシュ、『民主主義を今！』（*Democracy Now!*）のエイミー・グッドマンら平和構築者のインタビューをTMSのために行いました。

私は平和のためのヨーロッパ中央大学（EPU）に拠点を置き、世界中の平和研究者と知り合う機会に恵まれました。当時、ディートリッヒ・フィッシャーは元気で、部屋に私たちを大勢招き、彼のお得意のパーティ料理である溶けたチーズをかけたジャガイモをごちそうしてくれました。



*ヨハン・ガルトゥング、アントニオ・CS・ロサ、キア・キム ノルウェーのスタヴァンゲルにて*

ガルトゥングはEPUの学生に厳しかったことで有名でした。ガルトゥングが講義を始めた後に学生が講義室にやってくると、出て行くようにと言って、その学生が出ていくとその後ろでドアを閉めたものです。学生たちが「平和学の父」は思いやりに欠ける、と不満を漏らすと、私は次のような話をしたものです。

ヨハンは、アントニオと私、そしてトランセンド大学出版局のナコウという紳士を、彼が講演するPoint of Peace会議のためにノルウスタヴァンゲルに招待しました。私たちはヨハンの友人の一人が提供してくれた魅力的な家に3泊することになりました。そこで寝室が1つなのに私たちは4人という小さな問題が生じました。ガルトゥング博士の考えた解決策は何だったのでしょうか？寝室をそのグループで唯一の女性だった私に譲ってくれたのです。私がプライバシーを保つことができるようにするためでした。そして慢性的な腰痛に悩まされていたアントニオのために、ベッドからマットレスを外してリビングに置きました。ナコウはソファに寝ることになりました。「でも、ヨハン、あなたはどこで寝るの？」と私たちは聞きました。すると彼は「シーツをもらえたらキッチンの床に敷いて寝るから大丈夫です」と彼は答えました。そして彼は本当にそこで寝たのです。もちろん私たちは毎晩抗議し、数えきれないくらい沢山の他の方法を考え出したのですが、彼は「犬は自分の居場所を知っているんだよ。」と言うだけでした。彼は頑固で、信じられないほど寛大な心の持ち主でした。

2024年2月17日、ガルトゥングがオスロで93歳の生涯を閉じたという知らせを受け、世界中の平和構築の実践者や研究者は悲しみに暮れました。ガルトゥングは妻のフミさんと子どもたちを残して亡くなりました。この風変わりで気骨のある社会学者から影響を受けた個人や団体は数え切れないほどで、これからもずっと増え続けるでしょう。

ヨハン・ガルトゥング博士が設立した以下の団体のウェブサイトをご覧ください： トランセンド・インターナショナル、ガルトゥング研究所、オスロ平和研究所、平和研究ジャーナル。トランセンド大学出版局から出版された著書のリストは、こちらのリンクからご覧いただけます。ガルトゥングの実践者向け入門書『トランセンド・アンド・トランスフォーム』はこちらに紹介されています。さらに、アントニオ・CS・ロサは、時宜を得た情報が豊富で、そして広く読まれている国際的な週刊誌「トランセンド・メディア・サービス」の編集長を現在も続けています。

（翻訳：赤松敦子）

## 韓国大統領、ハーグのイ・ジュン平和博物館を訪問

PETER VAN DEN DUNGEN

ウィレム・アレクサンダー国王の招待により、韓国のユン・ソンニョル大統領（尹錫悦）が2023年12月11日から14日にかけてオランダを公式訪問した。尹大統領は、オランダを訪問した最初の韓国大統領であり、ハーグにあるイ・ジュン平和博物館を訪問した最初の韓国大統領でもある。

1995年に開館したイ・ジュン平和博物館は、1907年にハーグで開催された第2回ハーグ平和会議に当時の大韓帝国を参加させるため、高宗皇帝によって他の二人の使節とともに密かに派遣された韓国の外交官であったイ・ジュンを記念している。韓国は参加を認められず、イ・ジュンはホテルの部屋で遺体となって発見される。そのホテルが現在、博物館となっており、韓国の歴史と遺産を知る上で（韓国国外における）世界で最も重要な場所の一つとなっている。

韓国は、30年近くにわたって博物館の所有者であり献身的な館長であったイ・キハン氏とソン=イ・チャンジュ氏夫妻の努力のおかげで、この素晴らしい史跡による恩恵を受けているのである。

博物館を含む大統領の訪問について、ニュースやビデオ、写真に収められている。韓国に関する時事問題や文化、歴史について英語で情報提供を行っている韓国の放送局であるアリラン国際放送のアリランニュースの中で、大統領の訪問を先取りする形で最も参考になりかつ興味深い2分間のビデオが放送された。その映像の中では、ナレーションがつく形で、第2回ハーグ平和会議、その会場となったリッダーザール（ナイツ・ホール）、そしてイ・ジュン平和博物館が紹介された

（映像資料：Historical meaning of Ridderzaal and Yi Jun Peace Museum in The Hague - YouTube）

博物館訪問の様子は、韓国国民放送（KTV）で放送された2分間のビデオにも収録されている。また、これに先立つ形で、オランダのマルク・ルッテも同行した歴史的な建造物であるリッダーザール訪問の様子も収められている（映像資料：https://youtu.be/8cK9c_DeHJ0?si=z-lt2JnFVE1ZupGN）。大韓民国大統領室のウェブサイトには、十数枚の美しい写真が掲載されている。これらの写真には、大統領がイ氏とソン=イ夫人とともに、博物館の様々な部屋を訪れている様子が収められている。

※映像資料
https://www.president.go.kr/newsroom/photo_news/j0ardprn

また、大統領の博物館への到着と出発の様子も記録されており、到着の様子は30秒弱、出発の様子は2分近く映像に収められている。特に出発時の警備の様子や訪問が原因で起きた街中での騒ぎの様子がよくわかる。博物館はチャイナ・タウンのすぐ近くにあり、門が写っている。博物館の建物（400年前に建てられた）は市内の歴史的な場所にあり、有名な哲学者であるスピノザの家や記念碑、彼が埋葬されている新教会の墓地のすぐ近くにある。次のビデオをご覧ください。
https://drive.google.com/file/d/1xVpleMthKxZ1n46_3Qv2-lPelLV6QGkY/view
https://drive.google.com/file/d/1QAURSTXoy-rq4WOBZDspHkYqjiWXiq1C/view

（翻訳：李敬史）

*ハーグのイ・ジュン平和ミュージアム*

*Yi Jun Peace Museum, The Hague*
*Image courtesy of*
*https://geschiedenisvanzuidholland.nl/*

# 平和のための博物館とガンジーの非暴力主義

サイード・シカンダー・メーディ
Syed Sikander Mehdi

世界中のすべての博物館は、自分たちが選んだ記憶を保存し、映し出す。あちこちにある戦争博物館は、戦争、戦争の英雄、戦争で使う兵器、戦争の記憶を美化している。

これとは対照的に、平和博物館は戦争、暴力、そして人間社会の軍事化がもたらす壊滅的な結果に焦点を当てている。戦争博物館というコンセプトは、硬直的で固定的で非人間的なものだが、平和博物館というコンセプトは、戦争における人間とその苦しみに焦点を当てている。このような博物館は、歴史ではほとんど語られることのない物語を語り、苦しめられた過去や望まれなかった過去を鋭く浮き彫りにする。

時間の経過とともに、″平和博物館　″という言葉は、人種差別や過激主義、大衆の搾取、貧困、不自由などが原因で引き起こされる紛争や暴力の多くの側面をカバーしていないことに気付いた。それゆえ、2005年にスペインのゲルニカで開催された国際平和博物館ネットワーク（INPM）の会議において、歴史的な決定がなされたことも不思議ではない。それは新しい用語の採用であった。「平和博物館」ではなく、「平和のための博物館」である。

その結果、ネットワークの名称も変更された。　平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）となった。この変更は単なる名称の変更ではなかった。時代の変化に対応するための大きな変化であった。その結果、博物館の範囲は戦場だけにとどまらず、さまざまな国で経済的、政治的、社会的、文化的 暴力の犠牲となった人々が繰り広げている日常生 活の戦いも対象とするようになった。

やがて、新旧の奴隷制度、人権侵害、人種差別、不平等、民主主義の破壊、専制主義やポピュリズムの台頭といった問題が、平和のための博物館の学者や専門家の関心を集めるようになった。

同様に、平和博物館を観光地化しようとする誘惑に対しても、深刻な懸念が表明され始めた。また、平和のための博物館を全人類のための博物館としてではなく、特定の国家のための博物館として紹介するという一般的な慣行や傾向に対しても、懸念されるようになった。博物館は排他的で、自国の平和の英雄的行為を強調し、自国民や他国の人々に対する自国の暴力や戦争を隠す傾向があった。

現在、これらの博物館は包摂的な場所であるべきであり、自国の苦悩に満ちた過去についても語り、あらゆる場所で不正義と不自由と闘う非暴力の積極的な拠点として機能すべきであると強く求められている。

このような背景から、私は、過去と現在の非暴力指導者たちの平和闘争と平和の英雄的行為を保存し、展示し、強調するために、平和のための博物館が十分なスペースを割り当てるべきだと提案する。この提案には理由がある。
第一に、私たちが生活している世界は、大きな混乱に陥っている。それはまた、大きな抑圧でもある。国連、強力な国際市民社会組織、世界的な変革のための集中的　でよく宣伝された運動にもかかわらず、国家や強力な集団の暴力を制御することはまだできていない。
この点を説明するために、2003年3月のアメリカ主導のイラク侵攻、2022年2月のロシア軍によるウクライナ侵攻、そしてイスラエル軍によるガザのパレスチナ人虐殺は、今日まで続いていることを指摘しておこう。

*erico*

さらに悪いことに、新たな核兵器紛争が勃発する日はそう遠くないようだ。 同様に、非西洋世界全体の資源が抵当に入れられ、あらゆる種類の奴隷制度が生み出されている。これだけでは十分でないかのように、民主主義と自由はいたるところで攻撃を受けている。専制君主やファシストがポピュリズムの潮流に乗り、選挙操作や暴力団による暴力によって権力を掌握している。人民の力はいたるところで低下している。自由も同様だ。

しかし、無力感を感じる必要はない。今こそ、未来に向けた戦略を練り、あらゆる資源を結集し、大胆かつ創造的に課題に対応し、マハトマ・ガンジー、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ネルソン・マンデラのような非暴力の指導者たちに教えを求め、受動的な平和博物館を、ダイナミックで能動的な非暴力の中心へと転換させる時なのだ。

従って、平和博物館は、あらゆる時代、文化、地域の著名な非暴力指導者たちの人生と闘いを展示するスペースを確保することを提案する。特に世界の若者たちは、過去の非暴力闘争の力を知り、無力な者の力がしばしば強者の力に勝利してきたことを理解する必要がある。ガンジーの非暴力の英雄的行為 と、さまざまな社会の平和のための博物館によるその影
響を紹介することは、自由、正義、平和のための国際的な運動をかなり強化するかもしれない。

インドのモハンダス・カラムチャンド・ガンディー（1869年10月2日-1948年1月30日）は、20世紀最大の非暴力指導者の一人である。彼はいかなる政府の役職にも就かず、反乱軍やテロリスト集団を率いて、インドに定着した強力なイギリス植民地権力を打倒することもなかった。彼は優れた政治戦略家であり、大衆の非暴力的抵抗が山を動かすことができると信じていた。

彼はかつてこう書いている： 「どのような政府も、民衆の協力なしには、自発的であろうと強制的であろうと、一瞬たりとも存在することはできない」と。

ガンジーは人民の力を信じただけでなく、自分が正しいことを世界に示した。 デモ行進を組織し、ボイコットを敢行し、断食を続けて国民のための政治的要求を受け入れさせ、怒れる大衆を鍛え、すべての人に憎しみではなく愛を教え、抑圧された人々の味方になり、政府や政治的・宗教的過激派から牢獄に入れられることも命を狙われることも恐れず、何百万人ものインド人を熱狂させ、イギリス植民地帝国を揺るがし、インドの独立を可能にした。

生前、そして1948年1月30日に暗殺された後も、彼はアフリカとアジアでヨーロッパの植民地主義に反対する大衆運動を熱狂させ、勇気づけた。同様に、彼は南アフリカ、ヨーロッパ、アメリカにおける人種差別と不公正に反対する運動に活力を与え、力づけた。自由と平等の欠如とともに、増大する無秩序に対する現代の世界的な闘いは、これまで以上にガンジーを必要としていることは明らかだ。

モハンダス・カラムチャンド・ガンディーの人生、闘い、政治哲学を紹介し、映し出し、強調することで、平和のための博物館は、あらゆる場所で万人の自由と万人の尊厳を達成するための新たな世界的運動の立ち上げと強化に役立つだろう。

元カラチ大学国際関係学部教授であるサイード・シカンダー・メディは、パキスタンを代表する平和学者であり、平和博物館の専門家である。

彼のEメールアドレスは：sikander.mehdi@gmail.com

## 非暴力の季節

### デイトン:国際平和ミュージアム

米国オハイオ州デイトンにある国際平和ミュージアムは、トゥシャール・アルン・ガンディーとジョエル・L・キング・ジュニア牧師の協力を得て、「非暴力の季節」と呼ばれる計画を復活させた。二人の人物の家族は、平和的な抗議活動と世界的な人権活動を通じて永続的な遺産を築いてきた。

トゥシャール・ガンジーはインドの作家、活動家、ソーシャルワーカーであり、マハトマ・ガンジーのひ孫である。彼とジョエル・キング・ジュニア牧師（牧師、活動家、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士のいとこ）は、１月下旬の週末をデイトンで過ごし、この計画を推進し、特にウクライナで２年目の戦争が激化し中東やアフリカで恐ろしい紛争や最近の紛争が続く中、平和活動を継続しなければならないことを人々に思い出させた。

年

「非暴力の季節」とは、マハトマ・ガンジーが暗殺された日（1月30日）とキング牧師が暗殺された日（4月4日）の間の64日間を指す。「私たちは毎年1月から4月にかけてこの活動を続け、他の団体にも参加を呼びかける。それぞれの場所で、それぞれの地域社会で最も重要なことに集中できることを願っています」。

「非暴力の季節」とは、マハトマ・ガンジーが暗殺された日（1月30日）とキング牧師が暗殺された日（4月4日）の間の64日間を指す。それは「個人やコミュニティ全体を癒し、力づける方法として、非暴力の原則を広めることです」と、同館のケビン・ケリー事務局長は言う。「私たちは毎年1月から4月までこの活動を続け、他の団体にも参加を呼びかけていきます。それぞれの場所で、それぞれの地域社会で最も重要なことに集中できることを願っています」。

国際平和博物館の教育ディレクターであるアリス・ヤング・バソラは、「政治的、社会的に困難な時代、戦争が続き、人々が何か良いものを求めて飢えている時代に、人々を集め、彼らを輝かせることは重要なことです。今年は1年目ですが、この勢いを何年にもわたって継続させたいと思っています」と述べた。

「非暴力の季節」は、1998年にアルン・ガンジー博士とその妻スナンダによって、平和へのビジョンを世界的に共有し、何百万人もの人々に反響を与え続けている象徴的な2人の人物の死去の間の期間を記憶する方法として作られたもので、新しい取り組みではない。

トゥシャールによれば、「私たちが今日必要としているのは、非暴力と平和の理想に対する信仰の再確認なのです」。「ただ何かを記念するだけでは、目を見張るような変化を起こすことはできませんが、絶望的に思える今の時代には、小さな変化でも不可欠だと信じています」。

https://peace.museum/

## 展示「呼吸をさせて」
### テヘラン平和ミュージアム

テヘラン平和博物館で開催された ″Let Me Breathe ″展は、20世紀初頭のヨーロッパで重要な役割を果たした5人の先駆的な女性科学者と芸術家の貢献に敬意を表している。スイスのゲルトルート・ウォーカー博士、スウェーデンのナイマ・サルバム博士、ドイツのフリーダ・ペルレン、ドイツのケーテ・コロヴィッツは、化学兵器の使用がもたらす悲惨な結果について認識を高めるための努力で、1915年にクララ・イムマーヴァール博士が行った劇的で悲劇的な抗議活動に先行している。

1920年代から1930年代にかけて、第一次世界大戦の余波の中、彼女たちはたゆまぬ努力で平和を訴え、化学兵器の危険性に光を当てた。

この展覧会では、平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）の創設者であるピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲン教授の寛大な寄贈によるポスターやユニークな書籍・資料のコレクションを通して、女性たちの努力を紹介している。これらの資料は、彼女たちのかけがえのない貢献と平和への決意を示す証となる。展覧会では、科学的探求における倫理原則、世界平和、女性の権利の著名な提唱者であったゲルトルート・ウォーカー博士の努力に焦点が当てられた。彼女は化学兵器に反対し、それを「科学の倒錯」と非難した。

1924年、ワシントンD.C.で開催された女性国際平和自由連盟（WILPF）の大会で、ゲルトルート・ウォーカー、ナイマ・サールボム、エステル・アケッソン＝ベスコウの3人は、化学・生物兵器戦争に反対することに焦点を当てた科学戦争反対国際委員会を設立した。ベストセラーとなった『毒ガス戦争の到来』はWILPFの依頼で出版され、版を重ねた。女性の雇用と毒ガスの危険性に関する彼女の出版物は、1933年にナチス・ドイツで行われた悪名高い焚書処分で非難され、焼却された。この稀で貴重な本は、展覧会で展示された。

*Dr. Gertrud Woker*
ウィキペディアより

これらの資料の一部は、2015年、ハーグの化学兵器禁止機関（OPCW）本部で、WILPF100周年を記念してINMPが主催した展示会で初めて公開された。

テヘラン平和博物館は、イランが1980年代に化学兵器の犠牲となり、現在もその長期化する影響に対処していることから、これを主催している。テヘラン平和博物館（2007年設立）は、戦争と暴力の結果についての認識を高め、特に化学兵器の壊滅的な影響に焦点を当て、平和の文化を促進することを目的としている。TPMの意識向上プログラムに沿ったこの展覧会は、著名な平和／反戦活動家を紹介し、この分野における彼らの努力を評価することを目的としている。

2024年2月26日に開催された式典には、駐日大使や国連代表を含む様々な聴衆が集まり、この展覧会が人々の関心を高める意義を強調した。

「Let Me Breathe」展は3月11日まで一般公開され、来場者に化学兵器との闘いにおける女性たちの感動的な物語とその遺産について学ぶ機会を提供した。

*"Masks"*
*Malak Mattar*

## イギリス、ブラッドフォード

## 平和博物館…あと少し！

CLIVE BARRETT

英国ブラッドフォードにある平和博物館がコロナのために閉鎖されたとき、より良い、より広い場所を見つけるまで再開しないという決定が下された。長い時間をかけて探し、多くの計画を練った結果、2023年、ユネスコの世界遺産に登録されているブラッドフォード郊外のサルタイアにある、文化・商業複合施設として賑わうサルツ・ミルに移転することを発表した。

それ以来、博物館のスタッフと評議員たちは懸命に働いてきました。私たちは新しいスタッフを採用し、新しい館長の就任を発表できることを嬉しく思います。ジョー・ブルックは、博物館・遺産部門で25年以上の経験を持ち、最近ではリバプール国立博物館のデザイン部長を務めていました。ジョーは、この非常にわくわくするような移行期間、そしてその先、ソルツ・ミルの新しい場所でのリニューアルオープンに向けて、ミュージアムを率いていくことになります。ジョーは次のように語っている。

「ピース・ミュージアムのコレクションとストーリーは、ますます激動するこの世界に、これまで以上にふさわしいものとなっています。私は、このような素晴らしく勇敢な組織を率い、当博物館を再構築し、新たな来館者に届けるという次の素晴らしい章に踏み出す機会を得て、わくわくしています。」

*Joe Brook, 博物館館長 The Peace Museum, Bradford, UK*

開館が近づくにつれ、私たちは来館者やサポーターを勇気づけてきました。クライブ・バレット平和博物館理事長は、リーズ・オロフ・パルメ平和講演会「私たちの目的は平和であり、平和の文化は私たちの目的である」を開催した。- 「平和ミュージアムはどのように過去を保持し、未来を解放するか」講演の模様はオンラインで見ることができる。

https://www.peacemuseum.org.uk/news/watch-leeds-olof-palme-memorial-peace-lecture-2023/

計画通りにいけば、2024年の晩夏には一般公開が再開される予定である。ブラッドフォードで皆さんにお会いできるのを楽しみにしています！

*平和ミュージアムのコンセプトデザイン・イメージ。*
*Copyright: Creative Core.*

一方、当館所蔵品の一部は、英国やヨーロッパの他の博物館でも見ることができる。1980年代のバナー「Girls Say No to the bombs（少女たちは爆弾にノーと言う）」は、元々グリーナム・コモンの女性平和キャンプで使用されたもので、現在マドリッドのカナル財団で展示されているミュゼリア展「The Berlin Wall; a World Divided（ベルリンの壁：分断された世界）」の一部となっている。

*少女たちは爆弾にノーと言う 1980s Greenham Common banner. Copyright Thalia Campbell. The Peace Museum, Bradford.*

## パウ・カザルス博物館：平和のための感動的な博物館

**CLIVE BARRETT**

バルセロナから南西に1時間弱、スペインのカタルーニャ地方に、平和のための特別な平和のための博物館がある。それは、ある特別な人物の人生、功績、平和の証人を記念するものである。パブロ・カザルス（地元ではパウ・カザルスとして知られる、1876-1973）は、著名なチェリスト、作曲家、指揮者であり、平和の代弁者であった。

*ジョルディ・パルド、パウ・カザルス財団代表*

カザルスは有名で多忙な音楽家として世界中を巡り、何百回ものコンサートを開いた。1939年、ファシストのフランコが勝利した後、彼はスペインを去らざるを得なくなり、ピレネー山脈にあるフランスのカタルーニャ地方の町プラデスに居を構えた。1945年以降もフランコ政権を認める国では演奏しないと誓い、最終的には母親の故郷であったプエルトリコに移住した。1950年のバッハ没後200年祭には、沈黙を破るよう説得された。国連で2度演奏し、アメリカではケネディ大統領のために リサイタルを開いた。カタルーニャ人として の強いアイデンティティと、国境に対する嫌 悪感を併せ持っていた。カザルスは常にスペ インの民主主義や難民を支持し、1958年には核兵器反対を訴えた。国連への賛歌をオーケ ストラと合唱のために作曲した。多くの著名な音楽家たちからノーベル平和賞候補となり、1971年の国連平和メダルをはじめ、数々の平和賞を受賞した。

*パウ・カザルスは1971年に国連のためにチェロの演奏をした。*

パウ・カザルス博物館（https://www.paucasals.org/en/museum/visit/）は、地中海に向かって傾斜する砂浜の頂上にあり、平和博物館としてはおそらく最も美しい環境にある。カザルスは子供の頃、エル・ベンドレルのその浜辺に連れて行ってもらい、1909年にそこに家を建てるよう依頼した。1972年にカザルス夫妻が設立したパウ・カザルス財団が運営するこの広大な敷地が、博物館の核となっている。

敷地全体には庭園、高級レストラン、会議場がある。財団は今日、カザルスの音楽的・人道的遺産を促進し続けている。

2024年のヨーロッパ・ミュージアム・オブ・ザ・イヤーにノミネートされた素晴らしい博物館への改築は、ヌリア・バレステルを博物館館長とし、INMP諮問委員会のメンバーであるジョルディ・パルド財団事務局長をディレクターとするこの施設のチームによって見事に成し遂げられた。各展示室では、カザルスの様々な側面を、短い印象的なビデオとインタラクティブ・スクリーンで紹介している。様々な平和勲章を含む、多くの個人的な遺品も展示されている。来館者は、カザルスについての知識を深めるだけでなく、カザルスという人物、彼にインスピレーションを与えた人道的価値観、音楽と平和の美しい融合を感じることができる。パウ・カザルス博物館は、印象的で感動的だ。バルセロナに行く人はぜひ訪れてほしい。

パウ・　カザルス美術館は、　Avinguda de Palfuriana, 67, 43880 Platja de Sant Salvador, El Vendrell, Tarragona にある。サン・ビセン・デ・カルデルス駅から徒歩30分。

*パウ・カザルスに授与された国連平和賞（1971年）*

ミュージシャンであることは特権であると同時に、非常に大きな責任でもある。音楽家であることは、自然からの贈り物だと思わなければならない。この贈り物を尊敬と献身をもって愛し、その贈り物に敬意を表するために、仕事とさらなる仕事によって可能な限りのことをする以外に、私たちに大きなメリットはない。

私たちは信念と謙虚さをもって、美とシンプルさと真理を探し求めながら仕事をしなければならない。そして、私たち音楽家はより良い世界のために力を尽くさなければならない。音楽は、美と愛と平和のメッセージを伝えなければならない。

下の写真は、パウ・カザルス博物館のチェリストの像

Pau Casals

*Sculpture of a cellist at Museu Pau Casals*

## 増田正昭個展：被爆者の肖像画
## 語らなかった両親を描く

京都「被爆二世・三世の会」増田正昭

2024年2月13日（火）～18日（日）に、広島市galleryGにて開催された。NHK 放送、 Rcc放送、新聞各紙、毎日新聞は全国紙に載り、 3回掲載、中国新聞も3回掲載など 各マスコミに取り上げてもらい、大きな 反響がありました。した。

会期中、3回のギャラリートークをおこないました

① 私の両親は、ともに広島で原爆の被害にあった被爆者です。しかし、二人ともその体験を語らずに亡くなりました。被爆者の肖像画を多数描いてきましたが、今回初めて、両親を描くことに決めました。自分のルーツを見つめ直すにあたり、広島で両親が被爆した場所を歩き、調査を行いました。

なぜ今、両親の肖像画に取り組もうと思ったのか。そしてその過程で感じたこととは。画家として、被爆二世としての思いを語りました。

*増田氏（左）と彼の両親*

② 2022年に被爆南方特別留学生サイド・オマールさんの肖像画を描きました。2023年はオマールさんに縁ある二人の肖像画制作に挑みました。キャンバスに描いたのは、オマールさんと同じヒロシマを見た南方特別留学生ニック・ユソフさんと、オマールさんと共にヒロシマの夜空を見つめた栗原明子さん。ギャラリートークでは、3人の肖像画を前に完成までのエピソードなどを、それぞれの物語を見つめました

③絵画と文学が拓く被爆体験伝承の可能性～肖像画に描いた被爆者と共に～

肖像画を制作する際、被爆体験や平和への思いを聞き取りながらデッサンを仕上げていきます。この日は、制作に協力してくれた広島在住の被爆者・松本滋恵さんをお招きし、完成した肖像画を囲みながらお話を伺いました。絵画と文学、それぞれの方法で原爆の記憶を受け継ぐ二人と、体験伝承の可能性についても考えました。

*原爆ドーム前で増田氏と彼の父親*

それぞれのトークも 参加者多数で会場いっぱいになりました。

私の個展史上最高です、観覧者も500名超えました、繋がった人はたくさんで、美術館の館長はじめ学芸員の方々、平和記念館の方々、被爆者多数、被爆二世の方多数、出身校の方々、先生方々、博物館、大学の関係者の人たち、マスコミの方々、などなど、あとで聞いてびっくりする人など、紹介しきれません、

全国から　来ていただきありがとうございます、広島の方も最後まで支援いただきありがとうございます、

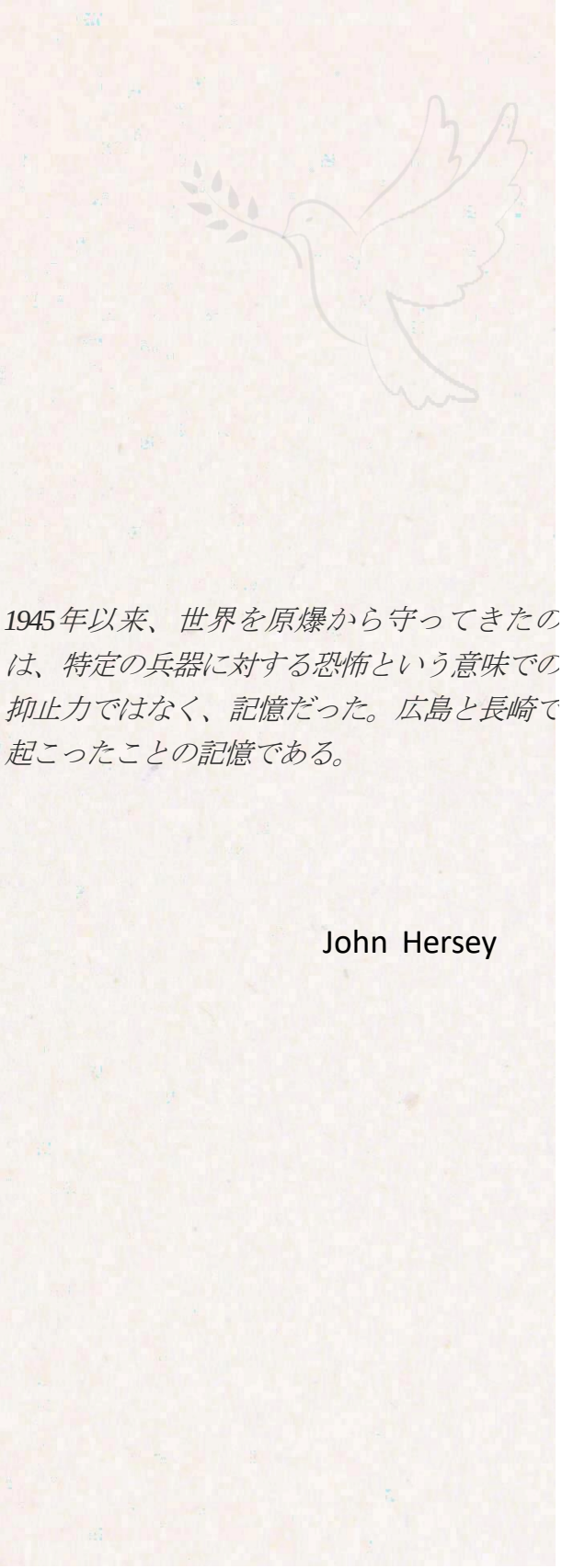
絵画の力、語り継ぐツールとしての役割があることが、この取り組みでさらに確信になりました ひきつづき 被爆者と被爆二世と対話して、肖像画を通じて被爆体験とその後の人生を語り継いでいきます。

毎日新聞　2024年(令和6年)

封印解いて 父母描く

被爆２世の画家　広島「里帰り」個展

*毎日新聞に掲載された記事*



*1945年以来、世界を原爆から守ってきたのは、特定の兵器に対する恐怖という意味での抑止力ではなく、記憶だった。広島と長崎で起こったことの記憶である。*

John Hersey

## 2023年ジョン・ラーベ記念館年次大会 中国・南京で開催

**Yan Shanyou**

INMP会員博物館である南京大学ジョン・ラーベ・国際安全区記念館は、ジョン・ラーベの家と共に、2023年11月23日にこの会議を成功裏に開催した。参加者は主に、ドイツ連邦共和国総領事館、シーメンス社（中国）、BSHホームアプライアンスホールディング社（中国）、BASF-YPC社（中国）を含むジョン・ラーベ開発基金、南京大学の関連部門、およびその他の協力パートナーから参加した。　中国共産党南京大学委員会常務委員、南京大学副学長の陳雲松教授がこの会議に出席し、素晴らしい総括のスピーチを行った。

*John Rabe 記念館*

11月23日は「南京の善人」ジョン・ラーベの誕生日である。彼は軍人ではないが、危機に瀕した貧しく弱い人々を助けるために名乗り出た。彼は政治家ではないが、数十万人の命を救うために各国政府を渡り歩いた。彼は良心の使者であり、正義の戦士であり、勇気の体現者であり、ヒューマニズムの輝かしい模範であった。南京大学構内に住んだジョン・ラーベは、南京大虐殺の歴史的証人であるだけでなく、愛と平和の象徴でもあった。それゆえ、この場所でイベントを開催することは、歴史的にも実際的にも大きな意義がある。

年次総会の司会は、南京大学アーカイヴとジョン・ラーベ記念館のウメイ学芸員が行った。

ジョン・ラーベ記念館館長のヤン・シャンユウ氏は、同館の5つの側面について年次報告を行った。
資源構築、サービス利用、研究交流、メディアコミュニケーション、基本管理についてである。
続いて、2023年ジョン・ラーベ発展基金の会計監査報告書を総会に提出した。

*年次大会*

国際平和都市（全10巻）の発表も、会議の重要なセッションであった。劉成教授は、長年にわたり平和研究の分野で活躍し、豊かな成果を上げてきた。ユネスコ平和学講座の主任教授であるだけでなく、ジョン・ラーベ研究センターの学術メンバーでもあり、同センターの研究と文化的交流に重要な貢献をしている。劉成編集長による新刊紹介とジョン・ラーベ開発基金寄付者への書籍贈呈が行われた。書籍発表の後、参加者全員でジョン・ラーベ生誕141周年を祝い、ジョン・ラーベ像に花を贈り、バースデーケーキを分かち合った。

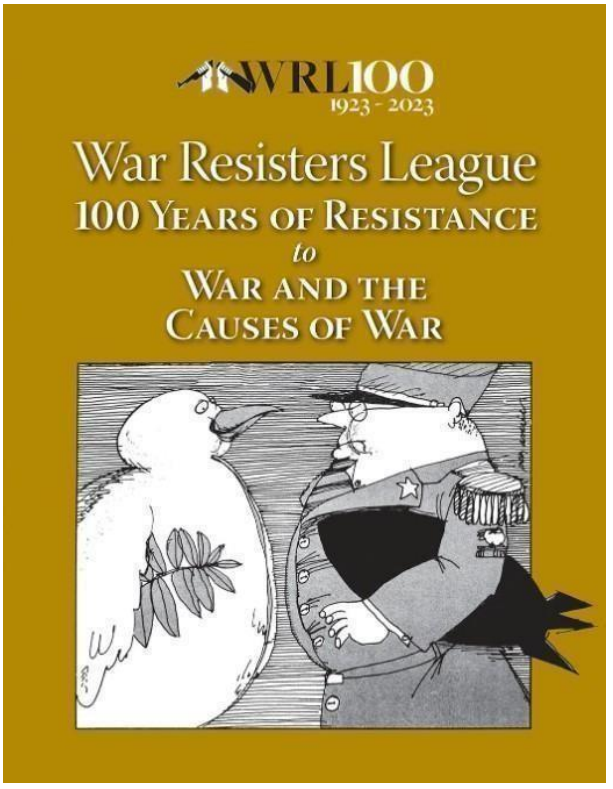
最後に、南京大学を代表して陳雲松氏が挨拶し、ジョン・ラーベ記念館の発展を長年にわたって支援・応援してきた寄付者とパートナーに心からの敬意と感謝の意を表した。また、ジョン・ラーベ記念館が南京大学の発展と建設において重要な役割を果たしていることを確認した。南京大学はこれまで通り、国際協力と交流を強化することで、ジョン・ラーベ記念館の建設と発展を支援していくことを表明した。

*書籍の公開e*

## 戦争抵抗者同盟（WRL）100周年記念巡回展 1923年～2023年

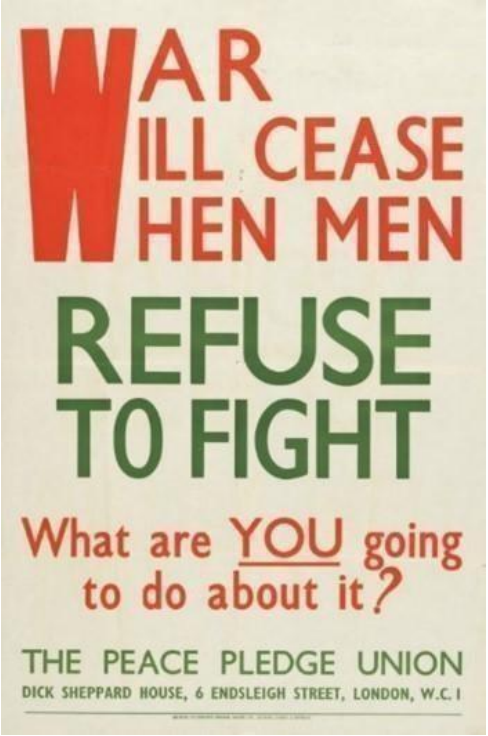
**Peter van den Dungen**

戦争抵抗者同盟（WRL）は1923年にニューヨークで設立され、1921年にオランダで設立された戦争抵抗者インターナショナル（WRI）の米国支部である。WRLは2023年に創立100周年を迎え、巡回展の開催と84ページの魅力的な小冊子の出版を行った。戦争と戦争の原因に対する抵抗の100年。この小冊子は、8枚の自立式パネルと長さ12フィートの横長年表バナーからなる展示の全内容を再現したものである。




*ペグ・アヴリルによる漫画が*
*掲載されたWRL冊子の表紙*

米国最古の平和主義団体であるWRLは、1915年に米国が第一次世界大戦に参戦する前にすでに反入隊同盟の結成に関与していたニューヨークの学校教師ジェシー・ウォレス・ヒューハンによって設立された。彼女は、「戦争は、人間が戦うことを拒否すればなくなる」という言葉を作った。それは WRLや、1930年代に英国で設立された平和誓約同盟（PPU）の横断幕にもよく掲げられていた。彼女は1924年から1955年に亡くなるまで、WRLの執行委員を務めた。たゆまぬ組織活動家、作家、演説家であったが、妥協を許さない過激な信念のため、生涯の大半を嫌がらせに苦しんだ
（https://www.warresisters.org/jessie-wallace-hughan-and-founding-wrl 参照）。




両手でライフルを折る姿（WRIとWRLのロゴ）が米国で最初に登場したのは、1933年にマンハッタンで行われたWRLのデモのときである。1946年6月、かつて投獄されていた戦争抵抗者たちが、ビキニ環礁で計画されていた原爆実験に抗議するため、国防総省の外をパレードしたとき、WRLは米国初の原爆反対デモを開始した。英国の核軍縮キャンペーン（CND）に関連し、平和のシンボルとして広く知られている核軍縮のシンボルは、1958年に英国で開催された核軍縮のためのイースター・ウォークにWRLを代表して参加したバヤード・ラスティンによって米国で紹介された。米国では、WRLは集団的市民的不服従と非暴力抵抗のパターンを確立する最前線に立ち、100周年記念展示に記録されているように、数多くのキャンペーンに関与してきた。

この冊子には、戦争抵抗者同盟が過去100年のキャンペーンで使用した印象的な横断幕、漫画、ポスターの多くが再現されている。例えば、社会主義指導者ユージン・V・デブスの「放火や強盗や暗殺を教えるくらいなら、子どもたちに軍事訓練など教えない」という言葉が引用された漫画など、そのほとんどが今もなお、その妥当性を失っていない。WRLの豊かな歴史とその活動の極めて重要な今日的意義は、第二次世界大戦後に設立され、「戦争の災禍から後世を救う」ことを目的とした国連の本拠地であるニューヨークに博物館を設立することによって、WRLを多くの人々の前に恒久的に示すに値することを示唆している。

展示と小冊子の詳細は

https://www.warresisters.org/centennial-history- projects。

*Jessie Wallace Hughan,*
*ジェシー・ウォレス・ヒューガン、1898年頃*

# 「詩的な作品（展覧会）」

マリアナ・ヴァデル・ヴァイス
Mariana Vadell Weiss

Arpilleras Poéticasは、チリ人のロベルタ・バチッチが企画した展覧会で、2023年12月から2024年2月にかけてチリ国立民族芸術博物館（MNBA）で開催され、コンフリクト・コンフリクト・テキスタイル・コレクション（そのデジタルアーカイブは、北アイルランドのアルスター大学にあるCAINアーカイブの関連サイトとしてホストされている）の作品が展示された。アルピレラは、チリの軍事独裁政権時代（1973年～1990年）に、人権侵害の被害者や目撃者の女性たちのコミュニティによって制作され、有名になった伝統的な織物芸術である。ロベルタ・バチッチとチリの詩人ハイメ・ウエヌンは、展示されたアルピレラと、主にチリの詩人による詩を組み合わせた同名の本を編纂した。この本は展覧会の冒頭で発表され、詩人の何人かが自身の寄稿を朗読した。

展示された作品は、ピノチェト政権時代に強制的に拉致された人々の母親、姉妹、娘たちの体験に奮起させられて、さまざまな文化的背景や社会的文脈を持つ多様な女性たちの手によって、廃材から制作された。その成果は、私たちを質感と色彩の次元へといざなうが、その見かけの素朴さの裏には、暴力や市民不安、抗議の物語が隠されている。

テキスタイル・アートは、これまでにも何度か美術館で取り上げられてきたが、アルピレラのような特定の技法は、工芸の領域に近いと考えられてきたため、伝統的にこうした文化的空間からは排除されてきた。それゆえ、その芸術的価値と証言的性質を認識し、創作過程と密接に関連するアスピレラの博物館における存在が重要なのである。手仕事や縫い物は、作り手の人生経験と作品との結びつきを明らかにするだけでなく、縫う、刺繍するという単純な行為を通して、記憶の再構築と伝達を行う。

MNBAの教育部門は、この展覧会で積極的な役割を果たし、ミュゼオグラフィに参加し、参加型の戦略や方法を開発した。複雑な論題に結びつく自身の体験や感情を分かち合いたいと願う人々に、ツールを提供するためである。これは、反省と集団的議論の場としての施設の役割を認識する必要性に応えたものであり、人権が認められ尊重される社会正義への道を開くことを期待してのことである。

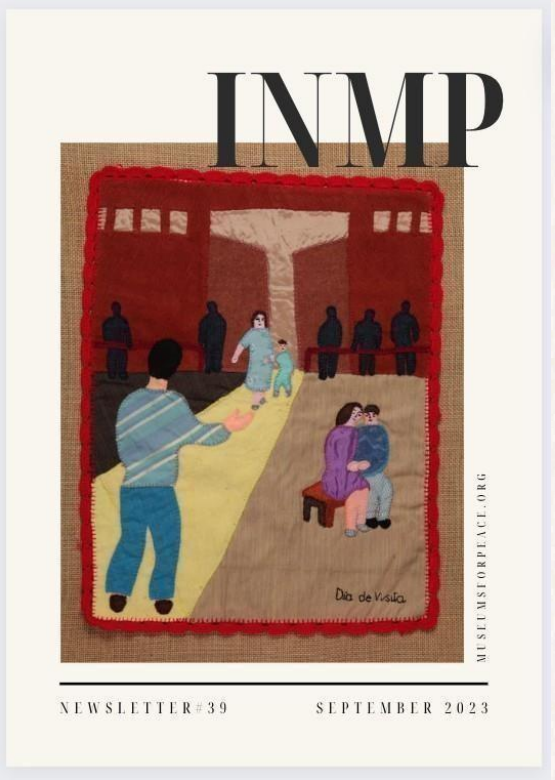
この展覧会では、来場者に「今日のあなたの生活に影響を与えている問題や葛藤は何ですか」という質問が投げかけられ、それに対して、展示の詩の部分を利用して、子供も大人も絵や物語や詩を投稿し、アルピレラの背中に付けられたポケットをイメージした小さな布のポケットの中にそれらを残した。これらのメッセージを通して、彼らは自分たちの人生を象徴する葛藤や、展示物との出会いからインスピレーションを得た考察を分かち合っている。

MNBAの教育チームの主な目標のひとつは、若者や子供たちの参加を奨励することである。この展覧会の場合、カラフルで質感豊かな素材であるアルピレラは、「アイデンティティの断片」というワークショップの土台を提供してくれた。画像に見られるように、アルピレラとの出会いや、段ボールや布切れといったシンプルな素材を使いながら、子どもたちは小さな人型を作り、その作品に自分のこだわりや未来への願いを書き、他の人たちと考察を共有する。時には自身や友人、家族、あるいは架空の姿だったりする。これらの作品の多くは、子どもたちによって寄贈され、オリジナルの作品の隣に展示され、このような空間が、文化施設の中で子どもたちが存在し、発言する権利を行使する機会となり得ることを示している。

Conflict Textiles」は、INMPニュースレター第39号で紹介された。39号やその他のバックナンバーは、下記のリンクからご覧いただけます：

https://inmp-news.museumsforpeace.org/

（翻訳：寺沢京子）




*Conflict Textiles was featured in Issue #39 of the INMP Newsletter. You can find #39 and other past issues at this link.*

## 伝言館でジャネット・ランキン特別展を開催

安斎育郎／ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館・館長

伝言館は、2011年3月11日に深刻な原発事故を起こした福島第一原発から約15km離れた楢葉町の古刹・宝鏡寺の境内に、事故から10年目の2021年3月11日に開設された平和博物館です。設立者は、1973年に東京電力の楢葉町への原発設置計画が明らかになって以来、一貫して原発に批判的な住民運動の中心となってきた宝鏡寺第30世住職の早川篤雄さんで、共同設立者は、本稿の筆者であり、2018年から2020年までINMP(平和のための博物館国際ネットワーク)のジェネラル・コーディネーターを務めた安斎育郎（立命館大学名誉教授、専門は放射線防護学・平和学）です。この僧侶と科学者のペアは1973年から半世紀にわたり、原子力の危険性を訴える活動を共同で取り組んできました。

*福島の宝鏡寺にある伝言館*

楢葉町は原発事故による全町民避難の対象となり、早川和尚は5年間、町を離れることを余儀なくされました。2015年に町に戻ると、東京電力の賠償金と私財を投じて、宝鏡寺の境内に「原発悔恨・伝言の碑」を建立し、原発事故の教訓を後世に伝えるため、安斎と共同して「伝言館」という名の平和博物館の設立を計画しました。伝言館は予定通り2021年3月11日に開館したものの、早川氏は2022年12月29日に83歳で惜しくも亡くなり、現在は安斎が館長を務めています。

伝言館では、原子力や核兵器に関する常設展示のほか、約3カ月に1度、平和に関するさまざまなテーマの特別展を開催しています。2024年1月15日から3月10日までは、米国初の女性下院議員を務めたジャネット・ランキンを特集した展覧会を開催しました。

私がジャネット・ランキンを知ったのは、彼女の生まれ故郷である米国ミズーラのモンタナ大学に招かれ、講義をしたのがきっかけでした。滞在中、観光客向けの道の駅を訪れた私は、メアリー・バーマイヤー・オブライエン著『大空に輝く明るい星-ジャネット・ランキン（1880-1973）』という本を見つけたのです。

*ジャネット・ランキン*

著者のメアリー・バーマイヤー・オブライエンは、ジャネットと同じくモンタナ州ミズーラの出身で、リンフィールド大学を卒業し学士号を取得しました。彼女の著作はアメリカの子どもから大人まで広く読まれています。ジャネットの生涯を綴ったこの本は、とても平易な文章で書かれていますので、帰りの飛行機の中で気軽に読むことができ、その内容にとても感動しました。この本は日本でも翻訳されて多くの人に読まれるべきだと思い、帰国後すぐにアメリカの出版社に交渉して日本語版を出すことになりました。こうして2004年、立命館慶祥中学校・高等学校の英語教師である南部ゆり先生とのコラボレーションにより、水曜社から日本語版が出版されました。

*「Bright Star in the Big Sky」日本語版 － 安斎育郎、南部ゆりの共同監修による『ジェネット・ランキン（1880-1973）』（水曜社、2004）*

ジャネットはアメリカ合衆国の女性参政権運動に積極的に参加し、最終的には史上初の女性下院議員となっただけでなく、第一次世界大戦と第二次世界大戦の両方に反対票を投じた史上唯一の連邦議会議員という稀有な人物になりました。アメリカ国民は、1941年12月7日（日本時間：１２月８日）の真珠湾攻撃直後、議会が全会一致で対日宣戦布告に賛成することを期待していましたが、驚くべきことに、上下両院で470票の賛成票があったのに対し、ジャネットはただ一人、参戦に反対票を投じたのです。

私は、「もし自分がその立場だったら、ジャネットと同じように行動するだろうか？」と自問しました。私は彼女の信念への忠実さに深く感動し、勇気づけられました。生涯平和主義者であったジャネットは、「平和のために可能な限りのことをせずにこの世を去ることほど恥ずべきことはありません」と言いました。88歳でベトナム戦争に反対する平和旅団を率いたジャネット・ランキンのことを思い出すと、私は今でも身の引き締まる思いです。連邦議会議事堂には、今日、ジャネットの銅像が建てられています。

2023年12月、日本の政権与党議員の金権活動が国民的な大きな関心事となる中、私はジャネットの清廉潔白で芯の強い政治家としての生き様を特別展示しようと考えました。

36枚のパネルと28ページの解説パンフレットからなるこの特別展示は、福島の山寺にある小さな平和博物館を訪れた人々に深い感銘を与えました。

## 平和のためのポスター展
## ウィーン平和博物館

2024年2月、ウィーン平和博物館は、2014年以来長引くウクライナの紛争を背景として団結したコミュニティの不屈の精神を示す証となる、 見る人の心に強く訴える「平和のためのポスター」展を開催しました。この展覧会は、ウクライナの平和を求める人々を熱烈に支援してきた自由の戦士たちと世界中の数えきれないほど多くのボランティアたちが示した偉大な勇気を厳粛に思い起こさせるものとなりました。

*ルリア・シュルガ作 『2023年の改築』*

ウクライナの紛争は、領土保全のための闘争であるだけでなく、人間の精神が試される深淵な試練でもあり続けています。逆境に直面して目撃された偉大な勇気は、私たちの集合的記憶に刻み込まれ、自由と平和の追求のために払われた犠牲を認識するよう世界の人々を促し、自分でも何か行動するように励ましているのです。この展覧会は、こうした犠牲を称え、戦争の影に降伏することを拒む人々の不屈の精神に光を当てる方法を探し求めて実現しました。

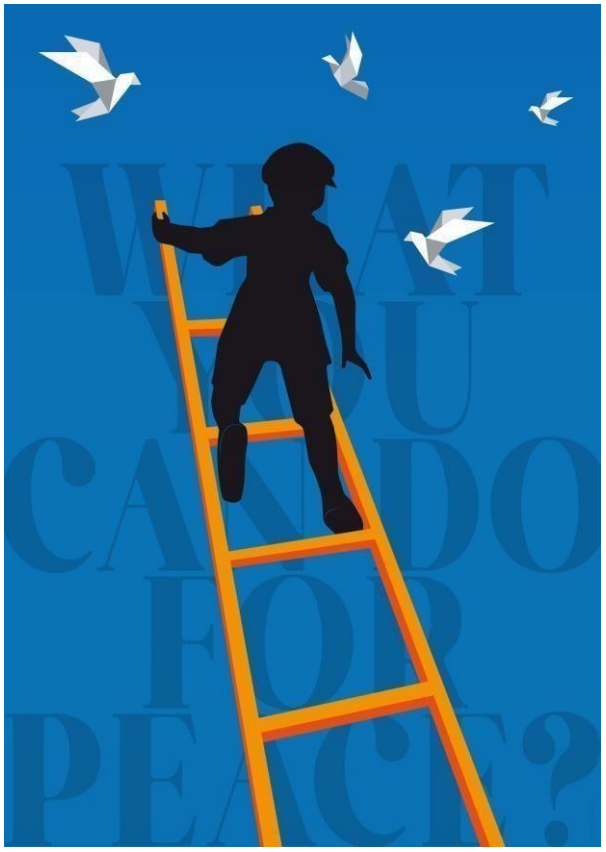
ウィーン平和博物館は、平和を希求し築く人々のコミュニティとして、団結と協力の原則に共鳴しています。集団で取り組む努力が調和ある世界への道を開くという信念の生きた証として機能しているのです。理想を共有するこの安息地では、平和の大義のために、個人が自由に自分の信念を表明し、揺るぎない支持を表明し、企画を立てることができるのです。

2022年2月は、ヨーロッパが再び戦争の不吉な影を感じることとなる重苦しい瞬間をもたらしました。過去の紛争の残響は、平和がもろく、積極的に守られなければならないものであることを荒々しく思い出させました。紛争の期間と安全であるという感覚が回復する期間の境界線ははっきりしておらず、その不確実さを私たちは引きずり続けるのです。しかし、この不確実さの中にあっても、平和に向けたたゆまぬ努力を続けるという決意は揺らがないのです。

「平和のためのポスター」による行動への呼びかけは、最も困難な時期に上げられた集合的な声を象徴しているのです。このポスター作品たちは、私たち世界的なコミュニティが結束と連帯を表現するための媒体として働きます。40枚の選ばれたポスターたちは真実を映し出すためのキャンバスとなり、他の人々が語ることができないかもしれないときに真実を語るのです。絵筆の描く一筆一筆、慎重に選ばれた言葉のひとつひとつが、人間

の精神の回復力と平和の追求への揺るぎない献身の証なのです。

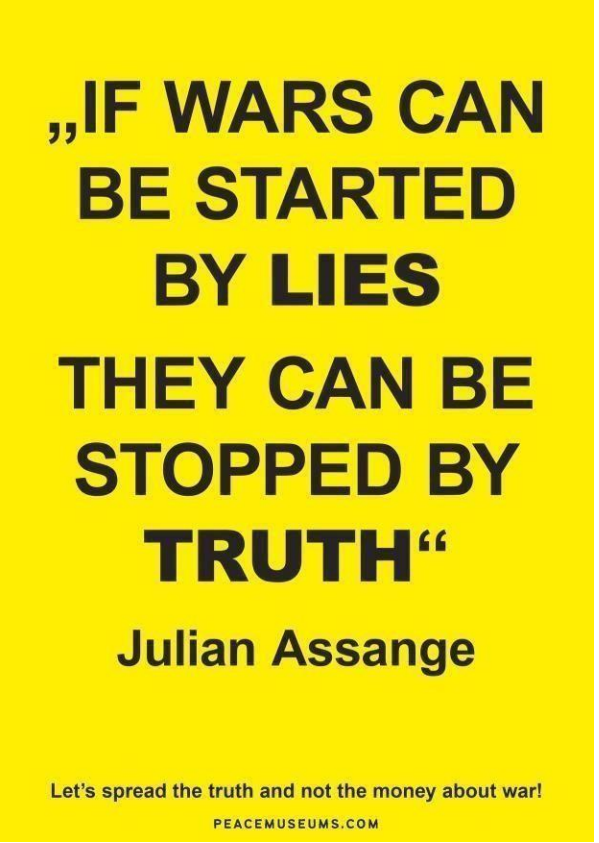
この展覧会は、単なる芸術的才能の展示ではなく、対話と理解が紛争に打ち勝つ世界を育むための責任を分かち合うということを映し出しているのです。「平和のためのポスター展 」は、鑑賞者に 「あなたは平和のために何ができますか？」という命に関わる問いを深く考えるよう促します。この問いは修辞的なものではないのです。内省への招待であり、行動への呼びかけなのです。




*ブレンダ・ゲレロによるポスター（メキシコ）*

私たちは分断されているという感覚にしばしば陥ってしまうこの世界において、この展覧会は架け橋となり、共通の目的で人々の心と頭を繋ぎます。それは国境を越え、平和の追求が世界的な努力であることを思い出させてくれるのです。芸術と表現の力によって、この展覧会は対話を開き、より平和な世界を築くための集団としての努力に貢献するよう個人を導くのです。

私たちが現在の不確実な世の中で舵を取って進んで行くとき、「平和のためのポスター」展は私たちが共有する人間性の証となるでしょう。それは希望の源であり、紛争の残響が、理解と思いやりと恒久的な平和の歌に置き換えられる未来への道を照らすものです。オンライン展覧会「平和のためのポスター」にぜひお越しください。
“Posters for Peace”




この展覧会のポスター「もし戦争が**嘘**によって始められるのなら、戦争は**真実**によって止められる」ジュリアン・アサンジ　　戦争に関するお金ではなく真実を広げましょう！
Peacemusuem.com

ウィーン平和博物館のウェブサイトはこちらからご覧いただけます

（翻訳：赤松敦子）

## 難民の一日：ガザ停戦巡礼の旅

Gerry Yokota

3月23日（土）、私は大阪でガザ停戦巡礼を企画した。これは、2024年1月14日にパレスチナのクリスチャンと国際的な支援者たちによって開始された国際的な運動の一環である。3月31日現在、19カ国173都市で巡礼が行われている（詳しくはhttps://www.gazaceasefirepilgrimage.com/）。

難民の苦しみを本当に理解したいという思いに根ざした連帯の表現として、私たちは10時間歩いた。これは、難民がガザ北部から最南端のラファ交差点まで歩くのにかかる時間とほぼ同じだ。

私たちは京都府の淀川河川敷公園の北端から出発した。河川敷を5時間歩いた後、公園を出て大阪市内に入り、さらに5時間歩き続けた。目的地は東大阪市にある布施源氏ヶ丘教会で、この教会ではイベントの閉会式を開催してくれるという。

天気予報が雨を告げ始めたとき、延期になるのではないかという問い合わせの電話がたくさんかかってきた。しかし、悪天候のために延期するとは夢にも思わなかった。ガザでは爆弾の雨が降っていたし、10時間後には安全で暖かい家に帰ることができた。

肉体的、精神的な痛みと苦しみを伴う難民の生活の一日を、おぼろげながらでも体感したことは、私を深く変えた。それは、黙祷やデモ行進とはまったく異なるものだった。博物館が、言葉ではほのめかすことしかできない現実を鮮明に伝え、記憶を残すことができるように。

このようなヴィア・ドロローサを歩くことは、難民への共感を培うだけでなく、希望を持ち続け、絶望に屈しない意志を強める。責任感を強め、不正と恐怖からの解放によって得られる喜びを信じることが不可欠であることへの直感的な敬意を抱かせる。身体は、正義を求めて日々忍耐する厳粛で緊急な義務を身体的に記憶するよう訓練される。

ネルソン・マンデラは、「パレスチナ人の自由なくして、我々の自由は不完全であることを、我々はあまりにもよく知っている」と宣言した。彼の言葉は、27年間の投獄と過酷な労働という身体的体験に根ざしているだけに、より重みがある。

巡礼の準備をしながら、私は南アフリカの反アパルトヘイト運動で使われたリズミカルな聖歌を思い出した。その運動は、パレスチナの子どもたちにも受け継がれている。

"Siyahamba, ekukanyen' kwenkos' 私たちは神の光の中を歩いている"

大阪巡礼では、心と体、個人と集団の一体感をもたらす別の聖歌が、私の心の中に自然に生まれた。この聖歌の4拍子のリズムに合わせて歩調を合わせることで、私は当時も今も前進を続けている。

「私はガザの中にあり、ガザは私の中にある。」

*このようなヴィア・ドロローサを歩くことは、難民への共感を培うだけでなく、希望を持ち続け、絶望に屈しない意志を強める。責任感を強め、不正と恐怖からの解放によって得られる喜びを信じることが不可欠であることへの直感的な敬意を抱かせる。身体は、正義を求めて日々忍耐する厳粛で緊急な義務を身体的に記憶するよう訓練される。*

*"Gaza, Children, Peace"*
*Malak Mattar*

## NEW MEMBER

### ウォンガバリー・アジア太平洋平和博物館
### 開館のお知らせ

フローラ・チョン Flora Chong

アルファ・エデュケーションは、2024年6月8日～9日にカナダ・オンタリオ州トロントにウォンエイブリー・アジア太平洋平和博物館（Wongavery Asia Pacific Peace Museum: APPM）を正式に開館する運びとなりました。私たちはこの発表ができることを心から喜ばしく思っております。APPMは、アジアにおける第二次世界大戦の歴史を批判的に理解する形で人間教育と平和教育を推進していきます。アジア以外でこの種の博物館は初めてであり、14年間の戦争（1931～1945年）の全過程と、世界が取り組み続けているその遺産を網羅しております。APPMは、特に西洋世界ではほとんど教えられておらずよく理解が進んでいない分野における人間教育のプラットフォームとして機能することでしょう。

APPMは、受賞経験のある日系カナダ人作家であるジョイ・コガワが言う「戦争のない世界というのは、他者の苦しみを知ることなしにはあり得ない」という強い信念に基づいて運営されております。当博物館は、人々のための博物館として、日本人を含むアジア全域に渡る被害者の体験や苦しみというものを大切にしております。これらの生々しい物語は、過去の困難な真実に私たちを否応なく向い合せ、私たちに人間性と平和の価値について再認識させることでしょう。そうすることで、APPMと来館者は、和解と平和に必要な、困難を伴いながらも命を与える労働を行っていくこととなるでしょう。

10にのぼる常設展示室にある創意工夫された展示やデジタル・メディア、双方向的なアクティビティを通して、来館者は戦争のイデオロギー的な根本原因や虐殺、日本軍の性奴隷、人体実験といった残虐行為についてだけでなく戦後の正義と記憶に関する考え方についても学ぶことが可能です。若い来場者にとっては、世界が直面している地球規模での紛争が激化する最中で、平和と正義の価値や平和構築に対して自分たちが果たし得る貢献について再度考えを巡らせる機会となることでしょう。当施設は、訪問後のワークショップやリソースセンターなど、学生のためのハブとして機能することでしょう。また、コミュニティ・ディスカッション、パネル・イベント、映画上映会、記念イベントなども行われる予定です。

ウォンエイブリー・アジア太平洋平和博物館は、アルファ・エデュケーションによる5年にわたる活動の集大成です。当博物館のメンバーは、研究者や学術関係者、評論家、デザイナー、ITスペシャリストによって構成されており、多国籍組織や学者や博物館、寛大な寄付者の支援を受けております。APPMは、限られたスペースの中で、アジアにおける第二次世界大戦の歴史的記憶を保存するという重要な使命を担っており、真正性、公平性、多様性、包括性を重視しております。人類のため、平和のため、そしてより良い世界のために、ウォンエイブリー・アジア太平洋平和博物館の使命は教育に重点を置いております。APPMの開館というのは長い旅の始まりに過ぎません。当博物館が提供する革新的な教育プログラムを通じて、若い世代が社会に貢献する人間や平和を伝える人間となるきっかけを与えられることをアルファ・エデュケーション一同、願っています。

ウェブサイト：
www.asiapacificpeacemuseum.com
www.alphaeducation.org

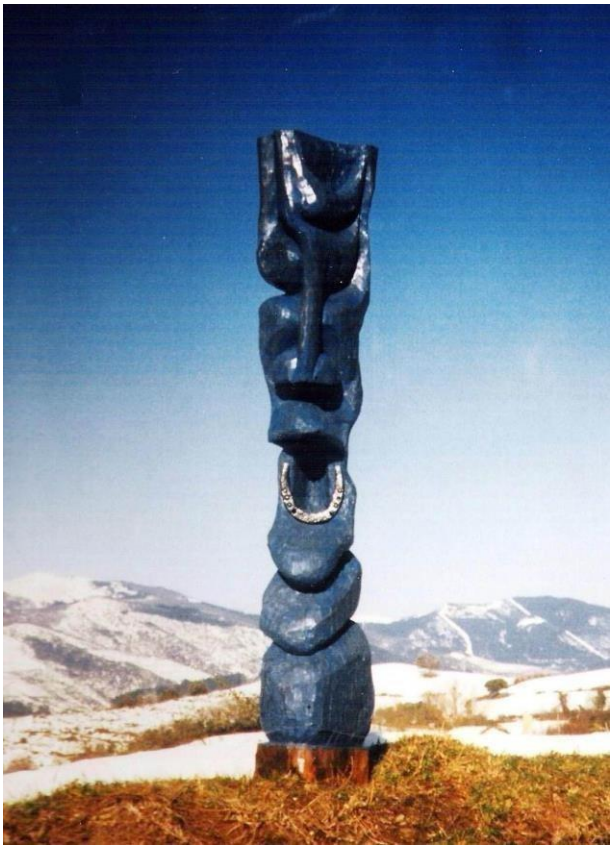
連絡先Eメール：info@alphaeducation.org

（翻訳：李敬史）

## ザルディ ZALDI

Francisco Arroyo Ceballos

歴史的背景として、この彫刻はバスク地方における内戦の爆撃を表している。ザッラの町の悲劇と、1937年6月21日にドイツのコンドル軍団（フランシスコ・フランコ将軍の軍隊を支援するために第三帝国が派遣した介入部隊）によって投下された爆弾の甚大な破壊的影響である。ビルバオ陥落後、サントーニャでの降伏までの2ヶ月間、何千人もの難民が到着したラス・エンカルタシオネスでは、300回以上の爆撃に見舞われ、血みどろの戦いが続いた。バスク地方では、反乱軍の航空隊が1,600回以上の爆撃を行い、13ヶ月の間に2,000回以上の爆撃が行われたことになる。



*"Zaldi" by Patxi Xabier Lezama, 1989*

哲学者ガストン・バシュラールが言ったように、ザルディは「叫び」であり、「形の中に眠っている生命」である。その叫びは封印され、言説の秩序に対して常に異質であり、汚名のように常に亀裂が入っている。まるで彫刻全体が封じ込められた呼びかけであるかのように。その中で認識されるそれぞれの現在を呼び覚ますことを望んでいる。その質は美的意図にあるのではなく、それを実体化する感情にある。トーテムとしてのザルディのその後の人生、第二次世界大戦後に生まれた共同体の象徴としてのザルディの人生は、驚くべきものではない。

何よりも神話的な世界であるザルディの世界では、絶望的な叫びの中で口が開く。その姿の必死の身振り。スペインで何が起きていたかがわかる。この彫刻は、破壊と再生、絶望と希望を同時に内包している。

Patxi Xabier Lexama（パクシー・ハビエール・レザマ）の作品は、伝統の起源への探求、神話的なものへの嗜好、そして感じたものを表現したいという純粋な欲求の源であるシュルレアリスムの結果である。それは、夢見られたものを少しずつ分解し、前衛性と現代性を与えようとする謎を解こうとするもので、時間と空間が融合することで、実質的な革新のタッチで彩られていて、これまでとは異なる作品が生まれた。それは、味わいと賞賛に値する特別な作品である。

エレガントで注意深い作品であり、素晴らしい内的なメッセージであることは間違いない。

## 「昨夜、私は最も奇妙な夢を見た」

## “LASTNIGHTIHADTHE STRANGEST DREAM””

**William P. Shaw PHD**

それは、世界中の何百万という人々、あらゆる国、文化、宗教の人たちが共有している夢である。　それは、いつの日か私たち全員がひとつになって、戦争に終止符を打つという夢だ。

1970年代のフォークソング”Last Night I Had the Strangest Dream”は、アメリカのフォークシンガー、サイモン＆ガーファンクルによって人気を博した。この歌詞は、特に今日の世界を支配している戦争と暴力の時代において、意味と希望を持ち続けている.
「昨夜、私は今まで見た夢の中で、最も奇妙な夢を見た。戦争に終止符を打つことに世界が合意した夢を見た。」

これは私たちの集団的な使命だ--戦争を終わらせること！　この大義に恥ずかしがらないようにしよう。　もし誰かが、あなたの平和博物館、あなたの組織、あなたの教室、あるいはあなたの個人的な価値観の使命を尋ねたら、単純明快に答えよう--戦争を終わらせることだと。

人類が、戦争は紛争解決の手段としては時代遅れであり、容認できず、野蛮であり、不道徳であると決断するときが、前へ進む時なのだ。　兵士と平和創造者が平和を求めるという共通の目標を持つのは逆説である！　核心的な違いは、いかにして平和に到達するかという点（殺すか、話し合いによるか）にある。　前者は一度もうまくいったことがないが、今も使われ続けている！　今こそ、よりよいシステム--外交、傾聴、学習、尊重、橋渡し、価値観の検討、そしてすべての側における変化のプロセス--に焦点を当てるときだ。

何世紀にもわたって戦争が続いてきた。各国は、戦争と英雄の物語を通して、アイデンティティと歴史を築いてきた。これがナショナリズムの根源であり、現在も続いている。各国の教育制度は、平和運動や平和の英雄の物語ではなく、戦争の物語を通して自国の歴史を教えている。

私たちの世界は、戦争、暴力、恐怖、ストレスと、優しさ、社会的支援、安全、平和への願望という、相反する2つの現実を同時に扱っている。前者はほとんどの見出しを飾るが、後者はほとんど報道されない。私たちは、人々がインターネットや情報に広くアクセスできる新しい時代にいる。　歴史上かつてないほど、人々は国や文化、宗教の垣根を越えることができる。人類は戦争をなくすための共通の基盤を見つけることができるのだろうか？　戦争は永遠に人類の歴史の一部であった。　これは変えられるのだろうか？

私は、紛争解決の手段としての戦争の「伝統」を疑問視する、前向きな兆しが世界中にあると信じている。その兆候とは、新しいテクノロジー、戦争の現実に対する新しい認識、国際協力に焦点を当てた新しい組織、人と人とのつながりの新しい機会などである。これらの兆候は、「いつの日か、私たち全員が一丸となって戦争を終わらせることができる」という希望を与えてくれる。

イギリスとスリランカの著名な作家であり科学者でもあるアーサー・クラークはかつて、すべての「革命的」アイデアは3つの段階を通過すると言い切った。　1）「うまくいくはずがない、まったくの空想だ」　2）「うまくいくかもしれないが、やる価値はない」　3）「最初からいいアイデアだと言っていた」！　おそらくクラークのメッセージ
は、「戦争に終止符を打つ」ことにも関係しているのだろう。

証拠はどこにあるのか？　障害は何か？　変化はどのように起こるのか？　私たちはアーサー・クラークの革命的変化の3段階のどこにいるのか？　ステージ1、ステージ2、ステージ3？

記事全文を読むには、次のサイトをご覧ください。
https://crosscurrentsinstitute.org/wp-content/uploads/2024/03/Strangest-Dream.pdf

ウィリアム・P・ショー博士は、アメリカ、オハイオ州シドニー　クロスカレント国際研究所所長である。

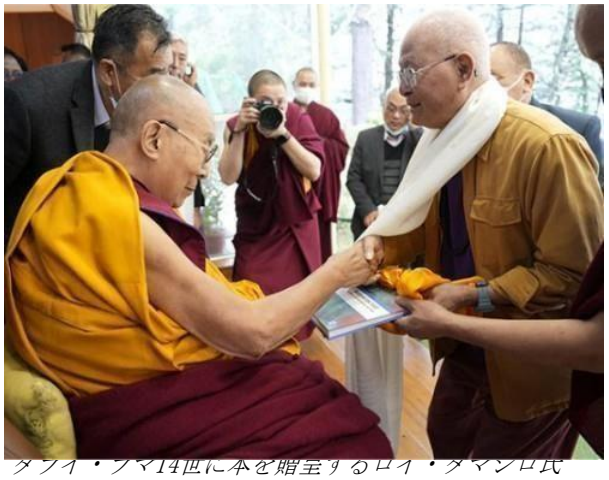
*"Last Night in Gaza"*
*Malak Mattar*

## ダライ・ラマ14世に『平和のためのミュージアム』を贈呈

Roy Tamashiro[1]

*"本書でその精神とエネルギーを表現している私たちは、あなたの優しさ、光、そして愛に深く感謝しています"。*

この言葉[2]とともに、新刊『平和のための博物館：歴史、記憶、変化を求めて』[3]は、チベット蜂起65周年記念の国際平和研究協会（IPRA）特別代表団の一員として、ダライ・ラマ14世に贈呈された。



*ダライ・ラマ14世に本を贈呈するロイ・タマシロ氏*

1959年3月10日、チベット人が中国共産党による自国の強制占領に抗議した日である。IPRA代表団は、インドのダラムシャラで行われた第65回民族蜂起記念日に参加し、中国共産党によるチベット侵略と継続的な占領で犠牲になった120万人のチベット人を追悼し、哀悼の意を捧げるとともに、中国政府による抑圧と迫害に今も耐えているチベット内外のチベット人への連帯と支持を表明した。

代表団は、チベット青年会議（Tibetan Youth Congress）の代表や、フリーチベット運動の他の活動家団体、中央チベット亡命議会のメンバーと会談した。代表団メンバーはまた、チベット著作・アーカイブ図書館を訪れ、「チベットの豊かな文化、長い歴史、亡命の経験に捧げられた」チベット博物館を見学した。この博物館は「.沈黙を強いられ、日常的な人権侵害を受け続けているチベット国内の数百万人のチベット人の代弁者なのです」。[4]

*写真（上）では、ダライ・ラマ14世（中央）が国際平和研究協会（IPRA） 特別代表団とポーズをとっている。マット・マイヤー（IPRA 共同事務局長［米国］左から右へ）、エラヴィ・ンドゥラ（バルンジ／米国］）、マリテ・ムノス（IPRA 共同事務局長［ アルゼンチン］） 、（ 膝をついて左から右へ）： マルセラ・アグデロ［コロンビア］、ロイ・タマシロ［AAPI ／米国］。*

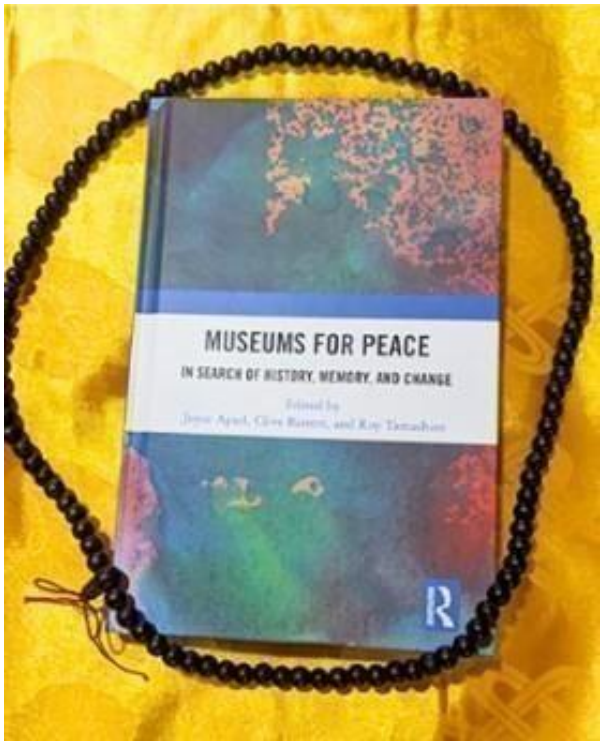
---

1 ロイ・タマシロ博士は『平和のための博物館』の共同編集者： 歴史、記憶、変化を求めて』（注3）の共同編集者であり、ダラムシャラへのIPRA特別代表団のメンバーでもある。

2 著者は、無名の「私たち」の事前の知識や同意なしに、下線部の「私たち」の代表を引き受けた。IPRA代表団および代表団のダライ・ラマ14世の儀典官にはこの誤りを伝えている。

[3] Apsel, J., Barrett, C., & Tamashiro, R. (2024). Museums for Peace : In Search of History, Memory, and Change. Routledge. https://www.routledge.com/9781032270012
J., Barrett, C., & Tamashiro, R. (2024). *Museums for Peace: In Search of History, Memory, and Change*. Routledge. https://www.routledge.com/9781032270012

[4] チベット博物館入口にある「私たちはチベット人であり、これは私たちの物語である」と題されたプレートからの引用。チベット著作・アーカイブ図書館とチベット博物館はともに、インド・ヒマーチャル・プラデーシュ州ダラムシャラにある中央チベット管理局の情報・国際関係局によって管理されている。




*Apsel, J., Barrett, C., & Tamashiro, R. (2024). Museums for Peace: In Search of History, Memory, and Change. Routledge.*

## 『平和のための博物館： 歴史、記憶、変化を求めて』編集：ジョイス・アプセル、クライヴ・バレット、ロイ・タマシロ

著作権　2024年
ISBN 9781032270012
288ページ　モノクロ図版19点
2023年12月22日発行　ラウトレッジ社

平和のための博物館： 歴史、記憶、変化を求めて.....世界中の多様な平和のための博物館が持つ、刺激的であると同時に相反する表現と目的を浮き彫りにしている。

様々な文化的、専門的背景を持つ著者たちが、「平和のための博物館とは何か、それは何を意味するのか」を探る。いくつかの章では、平和、紛争、記念化に関するオルタナティブな歴史を紹介している。この革新的なコレクションは、草の根の博物館、軍の性奴隷制、東アジアにおける歴史的記憶、アフリカ化した平和博物館運動における文化遺産を検証している。各章では、ガンジーの異なる表象、戦争の技術とそれへの反対、人種テロや帝国主義などの構造的暴力について論じている。政治的・文化的な力と博物館がどのように相互作用しているかを調査し、覇権主義的な物語を強化する博物館もあれば、平和の歴史を含め、沈黙させられた歴史を明らかにするために権威的な表現に抵抗する博物館もあることを示している。

『平和のための博物館』は、博物館学、遺産学、平和学、記憶学、社会正義、人権を研究する学者や学生にアピールするだろう。また、カルチュラル・スタディーズやトラウマ研究に携わる人々にとっても、本書は貴重な一冊となるだろう。

本書のオープンアクセス版（http://www.taylorfrancis.com）は、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止（CC-BY-NC-ND）の下で利用可能である。4.0ライセンス。

## 1992年以来、海外との国際交流を英語で伝えながら、INPM/INMPのニュースレターを日本に紹介

山根和代

平和のための博物館市民ネットワークの通信『ミューズ』の発行以前のニュース発行についての記事です。

以下のリンクは、1992年（第1回国際平和博物館会議がイギリスで開催）から 1998年（1999年に通信ミューズが発行される前）まで、高知の平和資料館「草の家」に国際交流ニュース（INPM & INMP）を紹介した筆者の活動を日本語で紹介したものです。

また、高知の「草の家」での様々な国際交流活動を紹介した英文の「草の家国際交流ニュースレター」もあります。

ページの一番下（「ログインせずに進む」）をクリックし、さらにページの一番下（「表示する」）をそれぞれクリックしてください。

「草の家」国際交流ニュース（英語版）：
https://aki.teracloud.jp/share/11b23df734bc2815

「草の家」国際交流ニュース（日本語版）：
https://aki.teracloud.jp/share/11b2cf958db71048

下の赤い部分をクリックしてください。
1992年から1998年までの13回の通信が掲載されています。
第3回平和ミュージアム国際会議が大阪と京都で開催された1998年に、日本市民ネットワークが結成されました。通信「ミューズ」は1999年から発行されています。
平和のための博物館市民ネットワーク共同コーディネーターの丸山豊氏は次のように語っています。

“山根さん発行の「草の家国際交流ニュース」チラッと読みました。欧米はもちろん中国、韓国、インドネシア、東チモール、インド、ケニア、クロアチアから国連、ユネスコまであり驚き
ました。高知から草の根の民主主義を英語版で世界に発信し交流し続けた歴史でありミューズ英語版の原点になるわけですね。”

1999年から今日までのミューズ・ニュースレターの英語版と日本語版へのリンクです。

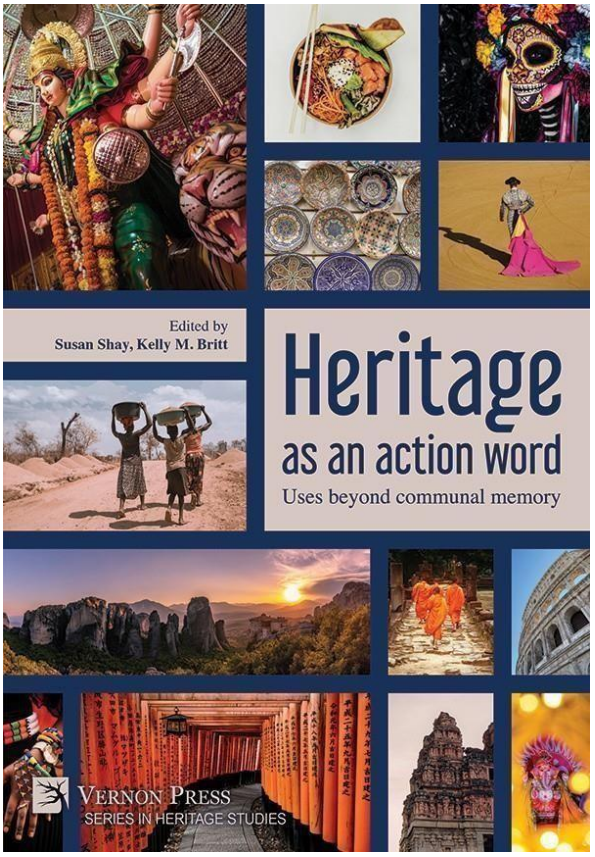
https://jcnmp-web.jimdofree.com/%E9%80%9A%E4%BF%A1-newsletter/

世界の草の根レベルの平和博物館を通じた国際交流活動を楽しく学んでいただければ幸いです。

山根和代（やまね・かずよ）元「草の家」国際交流担当、国際平和ミュージアム専門委員

## 出版物

### 共同体の記憶を越えて
Susan Shay




共同体的記憶の使用に関する学際的で重要な新刊が発売された。Heritage as an Action Word: Uses beyond communal memory（『行動する言葉としての遺産：共同体の記憶を超えた用途』ヴァーノン・プレス刊、2024年）では、世界各地から集まった著者たちが、社会問題や環境問題に積極的に取り組むために、さまざまなコミュニティ、国家、グループが、有形・無形を問わず、遺産をいかに意図的かつ創造的に活用しているかを探求している。

重要なのは、これらの研究が、遺産が政治的、経済的、社会的変革のための極めて貴重なツールとなりうることを示していることである。

遺産のナショナリスティックな政治利用、政治権力への抵抗としての遺産、環境科学としての伝統的知識、法的およびコミュニティ活動のための遺産、平和構築のための遺産、先住民およびマイノリティのエンパワーメントのための遺産、現象学的手法による過去探求のための遺産など、社会的記憶としての遺産に関連する洞察に富んだ研究が紹介されている。

当団体のメンバーにとって特に興味深いのは、ロシア、サマリアのウラジーミル・I・イオネソフ教授が平和のための博物館について書いた章である。平和ミュージアムの現状を思慮深く徹底的に分析した彼は、ミュージアムでの展示を通じた平和創造の理論を深く掘り下げ、積極的な行動の例を挙げ、平和と理解を促進するためのプログラムや展示をミュージアムで作り、展示するための革新的な解決策を提示している。重要なのは、本書が遺産を単なる社会的記憶、過去の出来事や人物、場所の静的な解釈として捉えるのではなく、遺産が現在に関わり、未来に関わりうる多様な方法を批判的に探求している点である。

本書は出版され、ヴァーノン・プレスのウェブサイトや、アマゾン、バーンズ・アンド・ノーブル、YBP、EBSCO、ProQuestなどの主要な流通業者を通じて販売されており、Bowker Books in Print、Nielsen Pubweb、IngramContentなどのインデックスにも登録されている。

この本のヴァーノン・プレスのページへのリンクはこちら(https://vernonpress.com/book/1924)。アマゾンのページへのリンクはこちらです。
https://www.amazon.com/Heritage-action-word-communal-Studies/dp/1648898440/

本書の購入にご興味のある会員の方は、割引コード「CFC42015052B」をご利用ください。この割引コードをお持ちの方は、ヴァーノン・プレスのウェブサイトからご購入の際、24%の割引を受けることができます。
https://vernonpress.com/book/1924

## 出版物

### ウィーン平和博物館から2冊の本

リシュカ・ブロジェット作、アンナ・イヴァンスカ絵の『決意の勝利』(Determination's Triumph)は、困難を克服し、共感を育む上での決意の深い影響について探求している。この物語では、決意を革新的な解決策へと導く個人の物語が巧みに織り込まれ、より平和な世界への波及効果を促している。ブロジェットの文章とイヴァンスカの挿絵が、回復力と決断力の変容を称える魅惑的な旅を作り出している。

イェリザヴェータ・ソトニク著『平和の声』(*Voices of Peace*)では、自由が平和に不可欠であるという考えを体現する個人の物語を掘り下げている。ソトニクの語り口とイラストは、個人の自由と、平和を育むための重要な要素である、恐れずに自己表現する能力とのつながりを明らかにしている。リスカ・ブロジェットが編集・出版したこの本は、自由と平和の関係について説得力のある探求を提供し、自由と平和がより調和のとれた世界の創造にどのように貢献するかを紹介している。

どちらの本にも共通しているのは、個人を「平和のヒーロー」として描き、決意の変革の力と、自由と平和の本質的なつながりを強調している点である。「ピース・ヒーローの自由の物語」と「決意の勝利」は、読者を楽しませるだけでなく、平和が単なる理想ではなく、具体的で実現可能な現実となる世界を築く上での自分の役割について考えるきっかけを与え てくれる。

### 公募 "平和の表現"

Peace ウィーンのピースミュージアムでは、エッセイ、詩、哲学的文章など、平和に関するあらゆる文章を募集している。選ばれた作品は、ピースミュージアム・ウィーンのウェブサイトで紹介されるほか、今後発行されるZINEにも掲載される。調和を育むこと、架け橋となること、平和な世界を思い描くことなど、あなたの考えを共有してください。言葉の力で平和のメッセージを広めてください。
投稿は officepeacemuseumvienna@gmail.com までお寄せください。

## カンボジア平和ギャラリー
**Na Rattank**

カンボジア・ピース・ギャラリー(CPG)は、世代間の対話と和解の場である。CPGに来てから、私はカンボジアのポジティブな歴史と平和構築のプロセスを学んだ。ギャラリーは、カンボジアがポジティブな面も持っていることを学ぶスペースである。

世代に関係なく、誰にとっても開かれた空間である。私たちは2018年から平和プログラムを企画した最初の世代の若い学生である。(若い学生から若い平和活動家へ)

カンボジアの歴史はよくわからず、フランスの植民地化とか、ネガティブな歴史しか知らなかった。同じ過ちを繰り返さないために、私たちは歴史を学びたいと思う。

ピース・ギャラリーは国家間の対話に貢献する。平和ギャラリーは、戦争被害者たちが恐れることなく自分たちの体験を語り、共有することを可能にし、過去に対する共通の肯定的な理解を生み出す。平和博物館は、年配の世代と若い世代の関係を築き、若い世代が歴史を学び、誇りをもって共有するだけでなく、平和構築のために必要なスキルを身につける場である。戦争が終結して以来、すべての政府やNGOが懸命に働いてきた。私たちは皆、自分たちの過ちを知り、歴史や歴史からどう学ぶかを学ん できた。私たちは30年近く戦争の中にいた。私たちはこのよう苦しみばかりの戦争に、 もう戻りたくない
暴力はいらない。 戦争はもうごめんだ.

カンボジア、バッタンバン、カンボジアピースギャラリー、　ディレクター、ナ・ラタンク

## 消えない記憶：タクバイの20年
**パットポーン・プートーン撮影：ディープ・サウス・ミュージアム＆アーカイブズ・プロジェクト**
**パットポーン・プートーン**

ラマダン（断食月）の平日、2004 年 10 月 25 日　早朝、武器の窃盗容疑で 1 週間以上拘留され、取り調べを受けていた村の警備員 6 人の釈放を要求するため、数千人がタクバイ郡警察署の前に集まった。午後遅く、デモ隊と警官隊との衝突が始まり、第 4 方面軍司令部はデモの武力鎮圧を命じた。警官隊は放水銃を撃ち、催涙ガスを使用した。7 人が死亡し、14 人の警官が負傷した。

*最愛の夫と結婚して以来、妻が初収穫の穀物を保管してきた納屋。夫はタクバイ事件で他界した。*

警官隊は事態を鎮静化させた後、デモ参加者にシャツを脱ぐよう命じ、デモ参加者の手を後ろ手に縛った。彼らは1,370人をトラックに積み重ねた。ナラティワート県タクバイ郡からパッタニ県ノンチク郡インカユートキャンプまでの距離をトラックが走った。トラックが到着したとき、77人が途中で死亡していることがわかった。さらに1人が病院で死亡した。検死報告によると、死因は"食料と水の不足、胸部圧迫による窒息、急性腎不全"であった。タクバイは、19年間の暴力の中で南部国境地方で起きた最も死者の多い事件である。展覧会「消えない記憶：タクバイ20年」は、タクバイ事件の犠牲者の遺族、死亡者、負傷者、行方不明者、その他事件に何らかの形で関わった人々へのインタビューから生まれた。彼らが語る経験と回想は、過ぎ去った年月の沈黙に重くのしかかる。彼らの不満、恐　怖、声なき声は、国家の不正義、暴力、不処罰の反映である。
次頁の展示

「Indelible Memories: 20 Years Tak Bai」は、声なき人々、まだ自分の物語を語る機会のない人々に声を与えることを目的とした、私た ちの2回目の展覧会である。そうすることで、このような出来事が二度と繰り返されないよう、国家 犯罪や不処罰との闘いに貢献したいと考えている。ディープ・サウス・ミュージアム＆アーカイブス・イニシアティブは、複数の意見や経験を共有できる民主的な空間を構築するために、公開の学びの場を設ける試みである。体系的なデータ収集と教育によって、知識と理解を深めることができると同時に、人々の記憶を保存・回復することができると私たちは信じている。事実を明らかにすることで、私たちは不処罰に異議を唱え、忘れようとする努力を克服しようとする。これこそが、移行期正義プロセスの核心であると、私たちは信じている。

*ある女性から寄贈された鳥かご。タクバイ事件で悲劇的な死を遂げた夫が育てた鳥を放した。*

ディープ・サウス・ミュージアム＆アーカイブス・イニシアティブは、2024年3月4日から7月31日まで開催される「消えない記憶：タクバイの20年」展（Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, 20 Baromaratchachonnani Rd, Taling Chan, Bangkok 10170 Eメール：deepsouthmuseum@gmail.com）に皆様をご招待いたします。

注：「消えない記憶：タクバイの20年」は移動展示です。私たちの展覧会の開催にご興味のある博物館、図書館、センター、団体がありましたら、ぜひお知らせください。平和教育活動のためのコミュニケーショ ン・ツールに研究を変換するプロセスに関する洞察を共有し、ご協力いただければ幸いです。

*タクバイ事件で足を失った男性の家*

*展覧会のポスター*

*学生が紛争解決のコースワークの一環として私たちの展示会を訪れた。*

## ＊編集後記＊

40号から新たに李敬史さんが翻訳にボランティアで参加して下さいました。英語版を日本語にする際に、編集技術上の理由で行間が不ぞろいになったりしている部分があり、お詫びいたします。

*“オリーブの収穫　Olive Harvest”*
*Malak Mattar*